

主語の機能と特性

山下美津子

Functions and Properties of Subject

Mitsuko YAMASHITA (Nieda)

Received April 30, 1987

抄録：主語は重要な概念であるにもかかわらず、定義づけは容易ではない。その原因は主語という語が複数の機能、特性を示すものとして用いられていることによる。本論文では各言語に共通する主語の中心的な機能、特性を見出すことを目的とする。主語—述部関係が文法関係で重要な役割を果す言語では、主題卓越型の言語と異なり、主題は一次的には表面化されず、主語が文頭に位置し、主題はその主語に一致するのが最も自然である。そのため英語の主語は、本来の機能、特性に加えて主題の機能、特性をも含んでいる。が、英語ではそれをも主語本来のものと誤って解釈されがちである。主題が、談話での注意の焦点を示し、旧情報も伝えるのに対し、主語は文構造の中で機能し、述部と動詞を軸として結びつき、関係を持つ。主題と一致するか、主題がなければ、主語は文頭かその近くに位置し、動詞と呼応、選択関係にあり、意味の上では過程の起点、中心点を示す特性を持つのである。

索引語：主語、主題、動作主、旧情報

Key Words： subject, topic, agent, old information

Abstract： It is rather difficult to define subject, though subject is a very important notion. The reason is that the term subject is used as a complex of some functions and properties. This paper aims to find a central function and properties of subject. In subject-prominent languages, not like topic-prominent languages, the grammatical relation subject-predicate plays a major role in the basic constructions. It is most natural that the subject be posed in initial position and topic be also identified with the subject because the topic is not expressed on the surface structure primarily in subject-prominent languages. Thus, in English, the subject includes the function and properties of topic, adding to its original ones. The function and properties of the topicness tend to be regarded as original ones of subject carelessly. The topic shows the focus of attention in discourse and also gives old information. The subject, on the other hand, functions within a sentence structure and is bound to predicate by the influence of verb. If the topic lacks in the sentence or is identified with the subject, the subject is in initial position and shows agreement and has a selectional relationship with the verb, and functions semantically as a starting- or existing-point of the process.

1. 序

「主語 (Subject)」は伝統文法のみならず、最近の文法の研究方法においても重要な概念である。文の構造を記述する上で、「主語」「述語動詞」「目的語」といった語は重要な役割を果たすが、特に英語においては、述語動詞との数の一致や受動文を説明したりする点で、主語の概念が必要になってくる。伝統的にも grammatical subject, logical subject, psychological subject などの語が文の構造を説明する時によく用いられて来た。が、一方、「主語」とは何かという点になると明確な答えを見出すことは困難であり、今日でも定義づけは簡単には行えない。しかし、構造の異なる言語を比較対照する上で、言語間に共通の主語の定義、少なくとも機能、特性について共通の認識が必要となってくる。もともと「主語」という語は統語上の機能を表わす語であり、定義づけを、各言語の統語的特徴にとどめるならば比較的容易であるかもしれないが、それだけでは言語間共通の認識を得るには不十分であるし、「主語」の概念の中心となる点を見逃すことになりかねない。実際、伝統的に psychological subject 等という語が存在するように主語と呼ばれるものには統語上の特徴以外にも他の特徴が含まれ、主語の概念にはある程度認識上の機能が含まれていると思われる。本論文では、それぞれの言語が持つ主語の特性の共通部分を取り出すことによって、完全に普遍的な主語の定義づけは困難であるとしても、ある程度、主語の中心的、核となる概念を取り出すことができると考え、主語が持つ特性について調べ、中心的な「主語」の概念を考察する。

主語の普遍的な特性という Keenan (1976) の30余の特性があげられるが、これは Dixon (1979) も指摘しているように、ある特性は表層的な構造上のものであり、又、あるものは形態上主語をマークする手段であり、又、あるものは普遍的な意味的役割についてのものであるというように、統語、形態、意味上の特性が30余り、そのどれにも priority をつけずに挙げられている。しかも、議論が循環的になってしまっており、本質的な特性はそのうちのいずれであるのか不鮮明である。Halliday (1970) は、主語は伝統的な意味では、4つの機能の複合体であるとして、広い意味での主語の定義づけを行っている。この分析は主語の機能を区別することによって主語の概念を理解しやすくしているが、この複合体という考えは英語以外の言語にあてはまらない場合もあるし、主語の概念の核となるものを知るには広すぎる。従って、この論文では分析の規準としてこの考えを参考としつつ、狭義の意味での主語の定義を探りたいと思う。まず、統語レベルで主語を定義する上での問題点を探り、そこから主語と呼ばれる名詞の統語上、形態上、意味上の特性を見ていく。さらに統語機能とは異なる分析レベルで主語と重なる旧情報 (old information)、主題 (topic, theme) と主語との関係を調べていくことによって主語にしか存在しない特性、機能を考察していきたい。最後にこれらを通して、英語における主語の特性を明らかにしていくことを目的とする。

2. 統語上の特性

各言語の主語を知る上で、主語を示す marker の存在は一つの目安となる。主語を示す文法手段のうち、形態上最も顕著なものは格屈折である。印欧語の多くの言語をはじめとして、類型論で対格言語と呼ばれる言語では、自動詞文でも他動詞文でも、主格で表わされている名詞、名詞

相当句が主語とみなされる。助詞を付与する言語でも、主格をあらわす助詞が付与された名詞が主語と認識される。従って、「主格」をとる NP が主語であると定義づけしても一見問題は無いようであるが、表層上格屈折を失った言語もあるし、能格言語における主語の問題が残る。能格言語では、自動詞文では (NP は 1 つしかないが) 無標格形である絶対格が、他動詞文では、ある条件のもとで絶対格で表わされる NP ではなく、有標形の能格で表わされる NP が主語として認識される。Split-ergative では、それぞれの言語のタイプによって他動詞構文は能格構造が対格構造で表わされるが、それぞれ主 (絶対) 格または能格で表わされる NP が主語として扱われている (Dixon 1979, DeLancey 1981, 山下1986)。このことは主語について重要な点を示していると思われる。それは、形態上は「能格的表現」⁴⁾をもっている言語でも、大多数の言語が統語上では、他動詞文の主語 (以後 A と略記) と自動詞文の主語 (以後 S と略記) を同一に扱う「対格的表現」⁵⁾をもつという点である。換言すれば、能格であれ、主格、絶対格であれ、格表示から独立して、A と S を同一のカテゴリリーに入れ、O (他動詞文の目的語を以後 O と略記) と区別する。たとえ同じ絶対格という格表示であらわされていても、S と O を統語上同様に扱う言語は極めて少ない (例外: Dyirbal 語)。その上、能格言語では O も述語動詞 (以後 V と略記) とも呼応するが、対格言語、能格言語ともに、主語は V と呼応する。又、主語と V には選択関係が存在する。V との呼応関係に主語が大きくかわり、V と選択関係にある点も統語上大切な点である。文中における A と S と O の役割から考えても、S と A は同一のカテゴリリーに入れ、O を区別した方がよいと思われる。この点は 3 節の意味機能面での考察でも明らかになる。

ここまで、何の定義もせずに、それぞれの言語で主語と認識されているものを認めてきたが、ここで何を基準に A と S を主語と呼んでいるかを考察することにする。能格、対格どちらのタイプでも、能格及び主格は、それぞれ対立する格である絶対格及び対格より文の始めの方に位置するという語順上の注目すべき共通点がある。語順に関してはかなり普遍的な傾向があり、Tomlin (1986) の 1000 語におよぶ言語の語順の調査によると、SOV 型 (ここでは AOV 型)、SVO 型 (AVO 型) がそれぞれ 45.8% と 41.5% を占め、次いで VSO (VAO) 型が 11.0% であり、O が S (A) より先に来る言語は極めて少数である⁶⁾。このことにより、文の始めの NP の位置が主語として認識されやすい位置であり、文の始めの NP が主語とみなされる傾向にあることが推察できる。このことは主語の重要な点であるだけでなく、主語にその他の特性を持たせることに通じる。以下見ていくように主語の特性と文頭の位置とは相互に関係し合っている。又、V が NP(s) と呼応、選択関係が必要な言語では、主語と認識される NP と V にはその点で強い関係がみられる。V との関係を考慮に入れて、これ以後、何かもっともな理由がない限り、文頭に置かれ、必要な場合には V と呼応、選択関係において関係をもつ NP を主語と呼び議論することにする。この統語上の機能に注意して定義した NP を「統語上の主語 (syntactic subject)」と名づけ、以後、特別な必要が生じないときは、「統語上の主語 (以後、s-subject と略記)」とは言わずに、「主語」とだけ呼ぶことにする。これは、英語の構造を説明する上での伝統的な grammatical subject とほぼ同じものをさしていると思われるが、まず一義的に、主語とは、このような NP のことを示すとし、これ以後、この NP のもつ特性、機能を見ていくことにする。

3. 意 味 機 能

主語が、AとSの集合で、Oより先に来るということは、話し手にとっても聞き手にとっても、主語 {A, S} がOより先に意識にのぼることを意味している。そしてこれが自然言語にみられる普遍的傾向であるとする、Vとの {A, S} {O} との関与の仕方に焦点をあてて主語の特性を見ることができる。我々や子供達の直感だけでなく、多くの文法学者が、主語と動作主とを結びつけて考えている。最近の研究でも、Dixon も、Keenan (1976) の挙げた30余の特性のうち、“subjects normally express the agent of the action, if there is one”⁸⁾ を主語に関しての唯一の普遍的な規準だと述べ、Comrie (1981) が“the prototype of subject represents the intersection of agent and topic”⁹⁾ であると述べているように、主語と動作主の概念は切り離すことができない。S-subject が動作主としてVに関するかどうか見るのは、意味機能の視点にたつて、s-subject の特性を見ることになる。

S-subject が動作主¹⁰⁾の概念と強く結びついているのは、Tomlin (1986) によって “The animated-First-Principle” と名づけられた普遍的傾向に明確に表われている。この principle によると、他動詞文において、最も活動性をもった NP は、より活動性の低い NPs に先行する¹¹⁾。S-subject は文の始め近くに表われるのであるから、活動性 (animacy) の高いもの程、主語になりやすいといえる。能格言語、対格言語においても、他動詞文の主語になりやすい NP の特徴は、動作性 (agency) 及び限定性 (definiteness) の高いものであるという事実¹²⁾ に一致する。指示性の問題は次の節で考察することにして、ここでは、活動性を中心に見ていくことにする。活動性の高い NP 程、主語になりやすいということは、言い変れば、主語は、活動性の高い動作主とみなされやすいことである。Comrie (1981) も述べているように、最も自然な他動詞文の構造では、活動性と限定性の高い NP が動作主で、最も低いものが被動体 (patient) であり、表わされる過程 (process) が動作であると言える。換言すれば、他動詞文においては、動作主が主語と認識され、動作主から目的語 (被動体) に動作が及ぶというパターンが典型的であるということである。

他動詞文の s-subject が動作主と認識される傾向にあることは確かではあるが、次の例文(1), (2)のように過程が *cut*, *hit* で表わされている文の動作主と比べると、例文(3), (4)のように *see*, *hear* であらわれた文の主語は、厳密には同じ程度動作主であるとは言えない。

- (1) John hit Mary.
- (2) John cut the rope.
- (3) John saw the play.
- (4) John heard a whisper.
- (5) John likes music.
- (6) John has blue eyes.

さらに、例文(5), (6)の主語の *John* には動作主としての機能はほとんどないと言ってよい。*See* や *hear* などの行為は、大多数の言語で *cut* や *give* と同じ文構造で表わされるが、*like*, *have* になると AVO 又は AOV 型の他動詞文では表わさない言語もかなりある (Dixon 1979)。言語の過程の表わし方は大別すると、自動詞文型と他動詞文型に二分されるために、そのどちらかで表

現しなくてはならない。厳密には動作を表わしてなくても、その過程に関与している物が二つあれば他動詞文となり、その過程を動作のように表わして、一方の関与者から、その他の関与者に動作が到着するという最も好まれる型を利用して種々の表現が表わされていると考えられる。つまり、文の始まり近くにある NP を動作を行った者、後にある方を被動体という図1で示す認識パターンが、文の流れと一致して、最も好まれ理解されやすいので、その型を用いて種々の過程が表現されるのであろう。

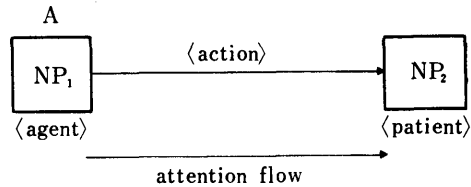


図1

従って、次の例文のように、本来活動性の低い NP でも過程が動作を表わし、その NP が A の位置に置かれると、擬人化されて動作主のように感じられる。

(7) A magnet will attract iron.

(8) The window closed the door.

自動詞文の場合は関与者が一つしかないため、関与の仕方は様々であるが、その一つの関与者 (NP) が主語となる。又、同じ動作を表わす場合でも、次の例文 (9.a), (9.b) でみられるように、(9.b) の方が *John* の動作主性が強く感じられる。この差は、O の存在の有無にあると思われる。

(9.a) John ran very fast.

(9.b) John ran the horse.

伝統的に *logical subject* という語があるが、この語は明らかにいわゆる主語の概念のこの一つの面、意味の面から見た機能を示していると思われる。

(10) The cake was eaten by John.

例文(10)では、*John* は動作主であり、伝統的に、*logical subject* として認識されてきた。ただし、この語用いられ方は、s-subject と動作主が一致しない時に、動作主を特に明記する目的のために用いられている。このことは動作主は重要な主語の概念であり、また s-subject と意味上の動作主が一致するのが最も自然な型としてとらえていることを示している。この点を踏えて、s-subject の意味機能について再度考察したい。先の例文(10)のような特別な受動構文の存在も示すように、文頭の位置は、無標な文においては、動作の始点として認識されるのにふさわしい位置であるといえる。つまり始めから(起点)から終わり(到着点)へという自然な意識の流れとは逆に、到着点を前にもってくる時は、それをわざわざ示して聞き手の注意を引きたい時であり、受動構文で表わされると考えられる。しかし、やはり逆の流れは不自然なため、動作主(動作の起点)を明示した受動構文は少ない(山下1985, 1986)。表わされる過程が典型的な場合は動作であり、その時、その動作の起点は、動作主として認識される。*See* や *hear* のように純粹には動作を表わさなくても、その関与者の一方は、活動性の高い NP を必要とし、それは活動性の低い NP より前に来るので A の位置におかれ、あたかも動作主であるかのように認識される。しかし、過程であらわされる activity が *cut*, *give* の場合より低いいため動作主とはならない。同じ活動性を

しながら、Vであらわされる過程の activity よって、主語の役割は変化するけれども、主語は動作・行為の起点、中心として過程に関与しているところは変わりはない。主語は、統語上だけでなく、意味の上からも、文に表わされる過程に強く結びついているものであることは明白である。以上のことを、activity と agentivity の強さを線であらわして簡単に図式化すると、図4のようになる。

4. 限定性と旧情報

次に、主語(s-subject)と definiteness(限定性)との関係を見ていきたい。まず NP の definite (限定的), indefinite (不定的) な性質について調べてみる。最も主語になりやすい NP は、人称代名詞である。限定性のある NP は、Chafe (1976) によると、話者が自分が思っている特定の指示物を、聞き手がすでに知っているか確認できていると思っている NP である、従って人称代名詞は当然限定性が高い NP であると考えられる。1, 2 人称が発話に直接参加しているものであるから特別に高いので、1 人称、2 人称に比べて 3 人称の代名詞が限定性が低い。次に来るのは、人名、特定の人物を示す NP である。このあとの NP では、NP の animacy の程度と definiteness の程度に関係があるという見方もある。つまり、inanimate nouns は高い割合で indefinite reference を持ち、animate nouns は低い割合で、でもかなりの割合で indefinite である (Trask 1979)。この性質上不定的な NP は主語になりにくい NP であるが、definiteness を示すマーカーを伴って definite となり、主語として用いられる。冠詞が存在する言語では定冠詞を用いて、冠詞のない言語では指示詞 (demonstratives) を伴って、NP の definiteness を明示する。英語では、定冠詞を用いるが、不定冠詞を伴った NP も主語になることもある。が、この割合は低く、不定的な NP が主語になることは極めて少く、多くの definite NP が主語となる。しかも主語は文の始め近くにある、つまり、話者、聞き手の両方が確認できるものから、話しが始まる傾向にあるということである。

旧情報は definite NPs を含み、新情報は、indefinite NPs を含んでいることから、旧情報は文の始めかその近くに置き、新情報は文の終わりに置くという普遍的に確立した傾向 (Trask, 1979) と、このことは、何らかの関係があると思われる。Trask は、definite NP で表わされていれば、旧情報を示すと理解しているが、Chafe (1976) によると旧情報 (given or old information) とは、「発話時に、そのことが相手の意識にすでにあると話者が思っている知識」である。これによると、たとえ相手にとって確認できるものであっても、発話時に話者の意識にこれから話そうとする知識がなければ、それは新情報となる¹⁷⁾。従って、次の例文でも見られるように、definite NP であれば、必ず旧情報であるとは限らない。

(11) I read the novel yesterday.

(12) I saw your son at the station.

例文(11)の *the novel* も例文(12)の *your son* も相手にとって確認可能であるので限定的であるが、話者がこの発話の時点で相手が「きのう、その小説を読んだこと」、「駅で息子にあったこと」を知らないと思っており、新しい情報を提供している。つまり、definite NP であれば必ず旧情報であるとは必らないが、その逆は正しく、旧情報は definite NP であらわされる。又、indefinite NP は新情報を示すのに用いられる。が、新情報なら必ずしも indefinite NP でしか表わされな

いと限らない。このように新・旧情報を簡単に NP の不定的、限定的で区別することは困難である。

又、確かに英語では旧情報は主語で提供される場合が多いし、新情報はその後にく述部 (predicate) であることも多い。Quirk et al (1985) も、主語の意味的特性として主語は典型的には話者によって旧情報とみなされている情報を示すと述べ、旧情報を示すことを特性の 1 つとしている。新・旧情報のレベルで文を分析すると、主語は旧情報を示すのが普通である。しかし、これは必ず一つの文が、新・旧情報でわけた場合に見られる傾向であり、文全体が新情報の場合も、新情報が旧情報に先行する場合もある。例えば、*What happened?* という問に対する答えなら答えの文全体がが新情報である。又、*Who read the newspaper?* という問に対してなら *John read it.* という答えの文の *John* は、高いピッチで強い強勢で、*it* は低いピッチで話され、*John* が新情報、*it* が旧情報となるであろう。同じく、相手が本を読んでいるのを見ていきなり、*I bought it yesterday.* という場合、旧情報は *it* である。(又、一体に、旧情報は低いピッチで、新情報は高いピッチで強い強勢で話されると言われているが、必ずしもピッチが高く強い強勢で話される語が新情報とは限らない。) このように、表面上で、きちんと、新・旧情報を分析するのは英語ではむづかしい。旧情報が新情報に先行する傾向は、相手が知ってることから話しを始めようとする人間の自然な傾向であるが、主語そのものの機能として旧情報を示すとするには疑問が残る。これは、むしろ次の節で述べる主題と関連があると思われる。

英語で、このように新・旧情報を区別するのが困難な問題の一つとして、英語には主語に関する情報を示す文法的手がかりが存在しないことにあると思われる。これに対し日本語には、新・旧情報を比較的はつきり区別する助詞がある。久野 (1973) は、日本語の「が」について、「主文の主語に現われる『が』は名詞句がその文の中で新しいインフォメーション (すなわち文脈¹⁹⁾ から予想することができないインフォメーション) を表わすことをマークする標識である」と指摘している。この説は、主語とみなされる NP につく「ガ」と「ハ」の違いを、情報の視点から見たものであるが、「ガ」と「ハ」の違いの一つを明確に示したものとといえる。次の例文で検討してみる。

- (13) 昔々、ある所におじいさんとおばあさんが、¹住んでいました。²おじいさんは山へしばかりに、³おばあさんは川に洗濯に行きました。⁴おばあさんが洗濯をしていると、⁵大きな桃が流れてきました。⁶おばあさんはそれをうちにもって帰りました。

例文(13)で、主語 (s-subject) である NP に「ガ」がついた下線 1, 4 で、新情報をあらわしているのは明らかである。例文の下線部 4 では述部も新情報である。これに対し、下線 2, 3, 6 は文脈から予測ができる旧情報を示している。「主語+ガ」が会話の始め、つまり文頭、又は近くに置かれると、誰か (何か) の存在・出現を表わす²⁰⁾のは、まさにこの新情報を伝えるからであると言える。一方、英語でも何かの出現の時は、限定的ではない NP が文頭にきて、文全体が新情報をあらわす。

- (14) A big peach came floating on the brook.

しかし、この形は、日本語で自然に用いられるのとは異なり、英語ではあまり用いられないし、動詞も出現をあらわす動詞、*come*, *live*, *appear* などに限られている。主語が、新・旧情報を示すマークを持っているのではなく、旧情報から新情報へという流れと、文における語順との関係で、主語が新・旧情報を示すのである。例えば、次の例文の構文は英語ではよく用いられる。

(15) There is a red car.

例文(15)は、s-subject は *a red car* で、新情報であるが、このようにわざわざ *there* を前に置くことによって、旧情報—新情報の流れにそい、新情報であることを示している。又、語順によって、旧・新情報を示そうとする例として、次の二つの文があげられる。展覧会かなにかで、一枚の絵を見ている人に、(16. a) の文で話すより (16. b) の文でいう方が自然である。

(16. a) A six-year-old boy painted the picture.

(16. b) The picture was painted by a six-year-old boy.

どちらも、文法的には正しい文であるが、新情報から文が始まるより、旧情報から始めた方が普通であるからである。英語においては、主語 (s-subject) が、旧情報を表わす機能を持つのではなく、語順の関係で、主語は文の始めか、その近くに置かれるので、旧情報を最も表わしやすい位置と一致するため、主語と、旧情報が一致する傾向があるのである。主語であっても、*there* の投入や主題化 (topicalization) によって、何かが前にくると、それが旧情報をあらわし、主語は新情報の一部となる。主語 (s-subject) は、旧情報と一致しやすい特性をもつが、旧情報を示す機能は本来持たないものである。

5. 主題と主語

5. 1. 主題—叙述

旧情報が情報の単位であるのに対して、テキスト、談話のレベルでこれと深く関係しているのが、主題 (Topie) である。Halliday (1970) と Kuno (1973) は、同じ意味で、topic を theme と呼んでいる。どちらの語を用いても、主題 (topic, theme) がこれから話そうと話者が選んだこと、叙述 (comment, rheme) は、それについて話者が話すことである。主題—叙述 (topic-comment, theme-rheme) の関係は、今まで見てきた主語—述語の関係とは異った視点で文を分析した時にみられる関係である。なお topic-comment も theme-rheme の関係も同じように用いられると考えるのでここでは topic-comment の方を用いる。主題 (topic) は、psychological subject と呼ばれるものにほぼ等しいと思われ (Hornby 1971, 1972)、伝統的にも、grammatical subject, logical subject と区別して用いられてきたようであるが、主題は、主語 (s-subject) とは異なった視点の上での基本的な概念であり、はっきりと区別して考えられなくてはならない。が、英語などの文を、主語—述部に分析した結果と、主題—叙述の関係に分析した結果が一致することが多いために、主題は主語と同一視される傾向にある。この節では、まず、主題と主語はどのように異なるのか、両者にどのような役割の差があるのかみていきたい。

主題は、話そうと話し手が選んだことがらであり、叙述はそれについて話されたことであるから、主題—叙述の関係はある意味では、主語—述部の関係より基本的であると言える。そのことを支示するのに挙げられる例は、子供の言語習得の過程である。子供は、「自動車、こわれた」、「バス、来た」というように、早い時期に主語—述部の構造はできていなくても、主題—叙述の関係はなりたっている文を話し、その後、「自動車がこわれた」「バスが来た」と言えるようになる。英語でも、子供は主語—述語の関係を身につける前に、主題を状況を述べたことの前か、後ろにつけて二部に分けて、例えば、“all broken, wheel,” “dump truck, all fixed”, “go in there, train,” のように述べるのである。²¹⁾ このように、主題—叙述関係は子供の比較的早い時期に身に

つけることができ、「主題を絶えず文法上の主語として表現できるようになるのは、後になってからであった²²⁾」と Hornby は英語を話す子供達を調べた結果を述べている。Hornby (1971) は主題は、主語の前段階であるとみなし、主題は主語として表現されると考えている。Halliday (1970) も主題 (theme) は主語のもつ 4 つの機能の一つであるとしている²⁴⁾。しかし、次の例文を見ると、必ずしも主題は主語として表わされていないものもあることがわかる。

- (17. a) *John* seldom eats fish.
- (17. b) *John*, he seldom eats fish.
- (17. c) *Fish*, John seldom eats.
- (17. d) *Fish* was seldom eaten by John.

(17. a) の文では、普通の強勢であれば、s-subject は *John* であり、動作主でもあり、主題であるとも言える。(17. b) では、主題は *John* であるが、*he* は s-subject であり、動作主でもある。(17. c) では、*fish* が主題で、s-subject は *John* で動作主である。(17. d) では、*fish* は主題でもあり、s-subject でもあるが、動作主は、*John* である。(17. a) と (17. d) は主題と主語が一致し、同じことを表現しているのだが、(17. d) では主題を *John* ではなく、*fish* にしたために、(17. a) とは表面上異なった形となって表われたと思われる。このことは、又、後で検討する。(17. b) と (17. c) では、主語と主題は一致せず、主題-叙述関係と、主語-述語関係は一致しない。このように、主語と叙述の関係と、主語-述部の関係は、どのようにかわりあい、又どの点が異なるのか確かではない。まず、違いの方から見ていくと、最も重要な点は、その位置にあると思われる。Tomlin (1986) が、“The Theme-First-Principle”²⁴⁾と呼ぶように、主題は文頭にくるという普遍的に確立した傾向がある。主語が文頭に来るのは、主題と一致する場合であり、主語と主題が一致しない場合は、主題が、主語に先行する。この語順に関与する点は、主語と主題の違いに大きな影響力を及すものと考えられる。

5. 2 Topic-prominent and Subject-prominent

主語 (S-subject) と主題のことを考える上で、興味深いのは、類型論からのアプローチである。最近の文法の研究法では、主題特有の面を調べることは困難であるので、類型論の立場から調べていき、言語を、文構造において、主語-述部関係が重要な役割を果たす「主語卓越型 (subject-prominent, 以後 s-p と略記) 言語」と、主題-叙述関係が主要な役割を果たす「主題卓越型 (topic-prominent, 以後 t-p と略記) 言語」に分類している²⁵⁾。英語をはじめ、印欧言語は s-p 言語に属し、Lahu 語、Lisu 語は t-p 言語に、日本語は s-p と t-p 言語に属する (Li and Thompson 1976)。Li and Thompson は、言語を四タイプに分類した²⁶⁾後、t-p 言語の特徴の分析に入っているが、ここで問題となるのは、s-p と t-p の関係は視点が異なるのに、それを同じ文法関係で比較してよいかという点と、s-p 言語でも、主題-叙述関係が全く見られないのではないのであるから s-p 型と t-p 型と言語を分るのは不自然ではないかという疑問が考えられる。この疑問は、s-p 言語の構造に慣っており、主語、述部が文の基本的な要素であると考えてしまいがちな者に生じるものである。Lahu 語や Mandarin 語などでは、文構造の基本的なものを、主語、述部と考えたのでは文法関係をうまく説明できず、むしろ主題、叙述関係で説明した方が自然であるという場合もある。日本語でも、主語と述部という関係だけでは説明がつかない文でも、主題の概念を入れると比較的説明しやすくなる場合がある。

- (18) ²⁶⁾ hɔ̌ ̄ na -qhɔ̌ yf̌ ve yò (Lahu)
 elephants top nose long prt declar
 “Elephants (topic), noses are long”

(19) 象ハ鼻ガ長イ

- (20) ²⁷⁾ Neì-xie shùmu shù-shēn da. (Mandarin)
 those tree tree-trunk big
 “Those trees (topic) , the trunks are big”

(21) コノ木ハ幹ガ太イ

視点を少しかえると、s-p 言語か t-p 言語かは文の構造上、最も重要で中心的な働きをしている NP を、主語—述部関係における主語と呼んだ方がふさわしいか、主題—叙述関係における主題と呼んだ方がふさわしい言語であるかということである。つまり、どちらがより基本的(一次的)かということである。従って、表層の文構造に、主題と主語と両方が別々に表われることも、どちらかしか表われないこともありうるのである。

次の節で、具体的に主語と主題の相違点を見ていく前に、s-p 言語に親しんでいる者にとって、主題が基本的であるということが理解しがたい理由を考えてみる。Chafe (1976) が、²⁸⁾ topic を “English style” と “Chinese style” と分けて説明したように、いわゆる s-p 言語の主題と、t-p 言語において存在する主題とは基本的に異なる点がある。T-p 言語では、一次的に主題が存在し、文の基本的な要素になっているのに対し、s-p では、主題は、二次的に存在する。つまり、s-p 言語では主題を基本的要素と呼ぶには、文中における比重が、主語より軽いということである。先の例文(18)を s-p 言語に親しんでいる者は “as for elephants, noses are long” と誤解してしまう (Chafe 1976)。が、“as for elephants” と「象ハ」とでは文における役割も意味も異なるのは明らかである。T-p 言語の主題は、s-p 言語と同じく、話者が話そうと選んだことからであるが、“as for~” で処理するより文法上大きなウエートを占めている。一方、s-p 言語の主題は、contrast の意味を含み、²⁹⁾ 例文 (17.b) (17.c) などの主題は “as for~” の意味だけでなく、他の物とコントラストをなしていることを示している。(17.b) (17.c) でも明らかのように、これらの主題は、主語—述部関係を基本とする文からコントラストを表わすために、二次的にできたものと理解できる。S-p 言語に親しんでいる者が、その関点で主題を考えると、s-p 言語、t-p 言語と分けることに疑問を持ち、t-p 言語の主題の性格を二次的な物であると解釈する恐れが生ずるのである。

5. 3. 主題と主語の相違点

前節で、主語—述部の関係が基本的でない言語があり、そのような言語では主題—叙述関係が重要な役割を果たすことを見た。この節では、これはどういうことを意味するのか t-p 言語での主題を調べることによって、主語と主題の違いを見ていく。もちろんこの二つの概念は共有している性質もあり関連があることも事実であるが、別個のものである。ここでは特に共有していない部分を中心に見ていくことにする。

主題と、主語の最大の相違点は、語順と、動詞との関係にみられる。まず、語順からみていくと、先に述べたように、主題には、文頭に来るという普遍的に確立した傾向がある。これは、t-p 言語では叙述より主題が先に置かれるというだけでなく、文に主題と主語と両方あらわれた場合

に一この主題は日本語のような s-p と t-p 言語における主題だけでなく、s-p 言語における主題も含まれ、それらと主語と両方が表層構造に表われた場合―主題は主語より前の位置におかれる。主題が文の始めにおかれるということが、主語、主題の違いに関係するので、第二節の syntactic-subject の定義の変更の必要性が生じてくる。つまり、「主題が表わされていない限り、文の始め、またはその近くに置かれ、呼応、選択関係において V と関係する NP を主語と呼ぶ」に変えなくてはならない。Li and Thompson(1976)が、主題と主語の違いの最初に挙げているのは“definite”についてであり、主語は必ずしも限定的である必要はないが、主題は必ず限定的であると述べている。先の t-p 言語の例文においても、主題は限定的である。種族を表わす NP もその名で示す種を指示しているので限定的であるから、例文(18)の *elephants* も限定的であるし、指示詞がついているので、例文(20)の *trees* も限定的である。しかし、この点は、definiteness の問題と考えるよりも、新・旧情報のレベルでみた方がより適切であると思われる。話そうとすることを選ぶとき、まずその発話の時点で相手の意識にすでにあると思っていることから話を始めるであろうから、旧情報となるのも当然とも言えるが、主題の位置が旧情報と述べるのに最適な位置であることにもよると思われる。次の例文でもわかるように、主題があると、たとえ主語が definite NP であっても主語は新情報である。

	<u>subject</u>	<u>predicate</u>
(22. a)	<u>As for John,</u>	<u>he read Shakespeare yesterday.</u>
	topic	comment
	old information	new information

次の例文 (22. b) の場合も同じである。John は definite NP で主語であるが、新情報の一部である。

	<u>subject</u>	<u>predicate</u>
(22. b)	<u>Shakespeare,</u>	<u>John read yesterday.</u>
	topic	comment
	old information	new information

が、次の例文は、英語ではもっと普通の形である。

	<u>subject</u>	<u>predicate</u>
(22. c)	<u>John</u>	<u>read Shakespeare yesterday.</u>
	topic	comment
	old information	new information

(22. c) では、主語 (s-subject) と主題が一致しているが、(22. a, b) の場合は主語と主題とが一致していない。旧情報は主題と一致し、主語とは一致していない場合もある。日本語でも、主題は「一ハ」がつき旧情報を示すが、その後につづく主語は、「主語+ガ」で表わされるとおり、新情報である。主語と主題が表面上別々にあらわれない時、「主題」を示す助詞「ハ」がつくと、その NP は文脈その他から指示のある情報を示すし、助詞「ガ」がつくと、新情報を示す。このように、旧情報を示す機能は、主語の方にあるのではなく、主題の方にあると考えた方がよいと思われる。旧情報から新情報へという情報の単位の流れと、主題から叙述へという流れが重なり、主題が旧情報を表わす機能を持つようになったのであろう。主題は、主語に先行するか一致して、旧情報を表わす。英語のように s-p 言語では、主題と主語 (s-subject) が一致することが多いの

で、主語が旧情報を伝えるとみなされがちであると思われる。

次に、重要な点の二番目として、動詞との関係をあげることができる。英語をはじめ s-p 言語では、主語は述部の動詞(V)と呼応する関係にあるが、先の例文(18)～(21)でも明らかなように、主題とVには呼応関係はみられない。主題とVが一致することは非常にまれであり、今までのところ主題とVとが必ず一致しなくてはならない言語は見つかっていない (Li and Thompson 1976)。又、主語とVは選択関係にあるが、主題とはその関係になくてもよい (Li and Thompson 1976)。その他、命令(文)化とか、再帰代名詞化とか、受動構文を作る場合等では、変化は、主題にはかかわりなく、主語とかかわっている。要するに、Vに関係することがらは主題よりも主語と結びついており、主題は、Vとはかなり無関係に考えられているようである。その理由は、主語と述部との関係よりも、主題と叙述の関係はより独立している (Li and Thompson) からだと考えられる。しかし、この場合、独立していると考えよりも、主語—述部の関係は、述部のVとの関係で強く結びついているのに対し、主題—叙述の関係は必ずしもVとの関係を必要とせず、より自由であると考えることができる。換言すれば、主語と述部の関係は、Vを軸に結びついているが、主題と叙述の関係はもっと自由である。このことは意味機能の面にも表われている。第三節で主語の意味機能を考察した際に、主語はVで表わされる動作・行為の起点また状態の存在点を示すことを、さらにその典型的なものは動作主としての役割を果たすことをみた。主題について調べてみると、話題として選びたいものは、相手の意識にすでにあるものであれば、Vとは関係なく比較的自由に主題になれる。主題には動作主としてみなされる傾向もないし、活動性の高いNPである傾向もない。つまり、主題は過程の起点および存在点を示す機能は無く、それは主語特有のものであると考えることができる。

主題は、話し手が発話の時点で相手の意識の中にすでにあると思う知識の中から、話題にしたものを選んで示し、相手は、主題によって、これから話されることを知り、次に続く叙述で述べられることを待つのである。主題によって、相手の注意を一箇所に引きつけることができる。

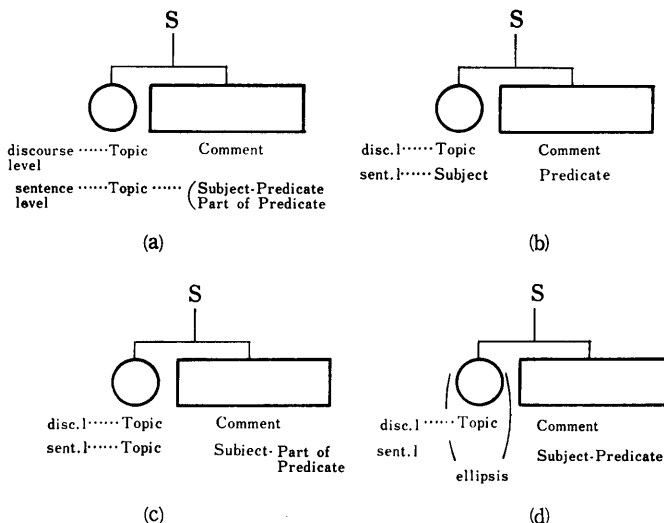


図 5

つまり、主題は、話者と相手の注意を焦点化する機能を持つのである。主語が過程の起点であり中心であるならば、主題は注意の起点であり中心であると言えるであろう。又、主語は、文のレベルで把握され、主題は談話、テキストのレベルでとらえられた概念であると考えられる。主題は注意を焦点化する働きをもち、発話での注意の中心を示すだけであるから、主題と叙述の中には、先程みたように主語―述部の間にみられるような過程を中心としたつながりが見られないのも当然である。叙述の部分は、主題に選ばれたことについてなら、必ずしも文の形をとる必要はない。

図5は、談話のレベルと文の統語レベルの分析を重ねて図式化したものであるが、(a)は例文(17.b)(18)～(21)、および(22.a)の場合をあらわしたものである。Commentの部分は、文であり主語―述語関係が表われることもあるが、必ずしも完全な文の形で表われるとは限らない。(b)の型は、例文(22.c)のように主題と主語が一致する場合であり、叙述と述部とも一致する。英語でこの型が最も自然であり、無標形である。T-p言語では(a)の型が自然であるのに対し、s-p言では(b)の型が基本であり、(a)、(c)は二次的な形である。(c)は、例文(17.c)、(22.b)の型である。(d)は、主題が省略された形で日本語で比較的良好に見られ、出現、存在などを示す文全体が新情報を表わす場合であり、例文(13)の1、4やと例文(14)などがその例である。英語が(b)型で高い割合で占めるのに対し、日本語は、Li and Thompsonによって、t-pとs-pの両方タイプの言語に属するとされているが、(a)、(b)、(c)、(d)、それぞれが大差なく用いられていることによって、そのことが示されていると思われる。

5. 4. 卓越性の違いから生ずる表現

前節で、主語とは過程の起点であり中心であるのに対し、主題は意識上の注意の起点であり中心であることを見た。この節では、それぞれが卓越していることによって、他方の言語タイプには見られない文の種類を挙げて、主題卓越性と主語卓越性を比べてみる。S-p言語にはみられないが、t-p言語に多くみられる型は、図5の(a)の場合である。前にも述べたが、(18)～(21)の例文の主題と、(22.a)の主題とは意味の上で異なる。(18)の例文は日本人にとって理解しやすく、すぐ(19)に訳すことができ、“As for elephants, noses are long”のように理解しないであろう。日本語では、(19)、(21)のような文は極自然に表現される。これらの文は二重主語文と呼ばれることがあるが、これは、どちらのNPも主語のように認識されがちなことによるとと思われる。

(23) 彼ハ頭が痛イ。

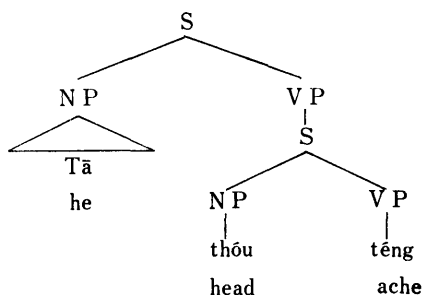
例文(22)や(23)など、どちらが主語か判断がすぐつかない日本人も多い。これらの文は、今までの規準でいくと、「象ハ」が主題で「鼻が長イ」が叙述になる。文のレベルで記述すると次のようになる。

(19) 象ハ 鼻ガ 長イ
主題 主語 述部

(21) コノ木ハ 幹ガ 太イ
主題 主語 述部

Teng (1974) は(23)と同じ意味と構造を持つ文を図6のように分析している。

この分析の長所は、主題 *ta* が *teng* の主語のように感じられる理由が説明されている点と、二重主語文と呼ばれる文の説明はうまくいっている点にある。欠点は、主題と、叙述の関係が



30)
図 6

主語—述部の関係のように把握されている点と、叙述は必ずしも文になるとは限らないのに、VP=S としてしまつて t-p 言語の基本的な文構造についてではなく二重主語文だけの説明だけで終わっている点である。先にもみたように、主題と叙述の関係は、V を中心軸とした主語と述部の関係より独立している。又、叙述の部分が文の形となるのは、いわゆる二重主語文と呼ばれている文だけであり、一般には、文の形にはなっていないけれども文法的に正しいのである。例えば、日本語でも、(19)、(22)、(23)でも、主語の NP は主題の NP の一部であるので、次のように言いかえても文法的には正しい文である。

(19') 象ノ鼻ハ長イ

(21') コノ木ノ幹ハ太イ

(23') 彼ノ頭ハ痛イ

これらの文では、叙述は、いわゆる述部だけである。その結果、主題が主語—述部関係の主語のように感じられることになる。主題卓越 (t-p) 型言語では、主語—述部の関係は必ずしも表層に現われなくてもよい。このような文は、s-p 言語にはみられず、まず、主語—述部関係がしっかり文の構造上できていなくてはならない。従つて、図 5 の(a)の形をとる時は、叙述が文になっているだけである。T-p 言語における主題—叙述関係は、主語—述部関係よりも重要な役割を果していることがこのような文に表われている。

これに対し、s-p 言語でみられ、t-p 言語ではみられない表現として、天候、寒暖、時間、距離などを示す場合で 'it' を用いた文がある。ドイツ語、英語、フランス語などでよく用いられる表現であるが、この主語は t-p 言語でなら表わす必要はない。

(24) It is warm today. (24') 今日ハ暖イ

(25) It is two o'clock. (25') 今、二時デス

この例文の主語 (s-subject) は、文の過程の起点、中心としても働いていず、特別な意味機能は持たないし、主題としての機能をも果していない。この *it* は、V との呼応関係に参与する必要から生じてきたと思われ、V との呼応関係でのみ役割を果している。T-p 言語のように、主題と叙述の関係が比較的自由な言語であれば、このような empty-it とか dummy-it と呼ばれる主語は文構造上表れる必要はない。主題は V と呼応する必要がないからである。英語など、s-p 言語では主語—述部関係が非常に重要で、基本的な文構造が、この関係で表現されることを必要と

するため、たとえ、主題—叙述関係が成たっていても、主語—述語が関係が成たっていないくは文法的に正しくないのである。このため、上のような *it* が必ず必要となるのである。

6. 結 論

伝統的に「主語 (subject)」の概念は複数の機能、特性を示すものから成立っている。本論文では、まずこれらの特性、機能を分析することによって、「主語」の中心的な、機能、特性を見出すことにあった。主語の機能を考察す上で注意しなければならないのは、主題との区別である。主語と主題は異なったレベルの異なった視点に立った用語であるが、英語では、主語と主題が一致している場合が最も自然であるだけに、本来、主題のもっている機能や特性を、主語の機能、特性をみなしてしまいがちである。本論文で考察した結果、主題には無く、主語が持つ特性の中で最も重要なものは、動詞との間に呼応、選択関係がある点である。主語が動詞と強く結びついていることは、統語面のみならず主語の意味機能の面でも明らかに表われている。活動性の高い NP 程主語になり易いことにも表われているが、主語は、動作、行為などの過程の起点として機能し、主語から発した過程は述部の中に表わされる到着点へと進んでいく。この最も典型的な場合に、主語は動作主としてみなされる。述語に到着点が明記されていない場合は、その動作性は弱くなるが、主語は過程の起った点を示し、過程が動作ではないとき、主語は過程の存在している点を示している。このように、主語は、統語、意味の両面で動詞との間に強い関係があるのである。これに対し、主題に関しては、必ず語頭に位置するという特性が最も重要なものであり、この特性が、情報の単位の旧情報と結びつく。情報は、旧情報から新情報へと流れるが普遍的であるので、文頭にある主題が、旧情報を伝えるようになる。主題が同一文に存在しない場合は、文全体が新情報を伝え、同一文内に、主題と主語が別々に表されている場合、主題が旧情報を、主語と述語が新情報を伝える。この情報との関連からも、主題には、相手の注意をある特定のものに向ける働きがあることは明白である。つまり、主題は談話における注意の中心であるといえる。一方、動作・行為の起点としての機能は主題にはなく、主語特有の特性であると考えられる。

従って、まず統語レベルで定義づけをし、その上に他の特性を記すのが、主語の中心的役割を述べる上で最もふさわしい方法であると思われる。つまり、「主題が別に記されていない場合には、文の始めかその近くに位置し、述語動詞と呼応・選択関係にあり、その文中にあらわれる過程の起点、中心点として機能する NP を主語と呼ぶ。」とするのが最も適切であろう。又、主語は文に密接した概念であり、文より大きい談話レベルの概念である主題とは一致する場合としない場合がある。一致する場合には、主語は発話における注意の中心としての機能を果し、旧情報をも伝えるのである。日本語では、主語と主題が一致しなくても自然であるが、英語では一致するのが最も自然な形である。従って、英語の主語は文頭に位置し、動作主として機能し、談話の主題を示し、旧情報を伝えるのが自然で典型的な形と言えるのである。しかし、英語における主題—叙述関係は、主語—述部関係程基本的ではなく、文の文法関係では、主題の機能、特性をのぞいた主語と述部関係が最も重要な役割を果すのである。さらに、中には、主語—述部関係では意味的には何も示さない文もあり、主語の最も核となる特性は「主題が別に記されていないかぎり、文の始めがその近くに位置し、述語動詞と呼応関係にある」という統語的な特性であると結論づけられる。この中心的な特性の上に、条件に応じて、主題性が付加されたり、動作の起点・中心と

しての機能が加わるようになると考えられる。

注

- 1) Keenan (1976) は, Basic subject の properties を, (A) Autonomy Properties, (B) Case Marking Properties, (C) Semantic Role (D) Immediate Dominance にわけて説明している。が, その特性の大多数は Autonomy Properties に入れられている。
 - 2) Dixon (1979), p.10.
 - 3) Halliday (1970) は, Sweet の説を引用して, 次のように主語の 4 機能を区別した。(p.164)
 “The subject, in its traditional sense, is thus a complex of four distinct functions, three in the clause……: 1. actor (‘logical subject’): ideational; 2. modal subject (‘grammatical subject’): interpersonal; 3. theme (‘psychological subject₁’): textual; together with a fourth function which is in the structure of the information unit; 4. given (‘psychological subject₂’): textual.”
 - 4) 5) 詳しくは, 拙書「能格と態の交替との関係」を参照していただきたい。
 - 6) Tomlin (1986) によると O が S より先にわるパーセンテージは, 次のとおりであり, 非常に少ない。
 VOS 型1.5%, OVS 型0.3%, OSV 型0.0%
 - 7) DeLancey (1981).
 - 3) Dixon (1979) p.110.
 - 9) Comrie (1981) p.101.
 - 10) Tomlin (1986) pp.102—119.
 - 11) Ibid., Tomlin は animated NP という表現を用いて次のように説明している。
 “in simple basic transitive clause, the NP which is most animated will precede NPs which are less animated”
 - 12) 拙書 (1986) に示した下記の図を参考にしていただきたい。(p.140)
- | | | | | | | |
|--------------|-----------|----------|-------|---------|-----------|----------|
| | 1st & 2nd | 3rd | Human | animate | Inanimate | Abstract |
| | person | person | nouns | nouns | nouns | nouns |
| | pronouns | pronouns | | | | |
| agency | 5 | > 5 | > 4 | > 3 | > 2 | > 1 |
| definiteness | 5 | > 4 | > 3 | > 2 | > 1 | > 1 |
-
- split

←—————→

ergative accusative-construction

languages ergative-construction
- 13) p.724.
 - 14) p.754.
 - 15) p.38.
 - 16) Chafe (1976) p.30.
 - 17) Ibid., pp.30—33.
 - 18) Quirk et al (1985) p.726.
 - 19) 久野 (1973) p.210.
 - 20) Ibid., pp.212—213.
 - 21) Hornby (1971) p.1977.
 - 22) Ibid..
 - 23) Lehman (1976) が歴史的には, topic-prominent language から, subject-prominent language が発達していったと述べているのとは一致していて興味深い。
 - 24) Tomlin (1986) pp.37—72.
 - 25) Li and Thompson は, 言語を subject-prominent languages, topic-prominent languages, both subject and topic prominent, neither subject nor topic prominent に分類している (p.459).
 - 26) この例文は, Li and Thompson (1976) より引用した。
 - 27) この例文は, Li and Thompson, および Chafe (1976) より引用した。
 - 28) Chafe (1976) pp.49—51.
 - 29) Chafe (1976) もこの点を指摘して, 英語の topic という語を用いると誤解を生じるので, contrastive-

ness という語に改めた方がよいといっている。

30) Teng (1974) p.461.

References

- Chafe, L.W. 1970. *Meaning and the structure of language*. Chicago: The University Chicago Press.
- . 1976. Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics and point of view, In Li, 25-55.
- Comrie, B. 1981. *Language universals and linguistic typology*. Oxford: Balackwell.
- DeLancey, S. 1981. An interpretation of split ergativity and related patterns. *Lg.* 57. 626-657.
- Dixon, R.M.W. 1976 (ed.). *Grammatical categories in Australian languages*. Cambera: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- . 1979. Ergativity, *Lg.* 55. 59-138.
- Halliday, M.A.K. 1970. Language structure and language function. In Lyons, 140-165.
- Hornby, P.A. 1971. Surface structure and the topic-comment distinction: a development study. *Child development*. 42. 1975-1988.
- . 1972. The psychological subject and predicate. *Cognitive psychology* 3. 632-642.
- Jespersen, Otto. 1924. *The philosophy of grammar*. London: Allen and Unwin.
- Keenan, E. 1976. Towards a universal definition of "subject". In Li, 303-333.
- 久野 暁, 1973, 『日本文法研究』, 東京: 大修館。
- Lehman, W.P. 1976. From topic to subject in Indo-European. In Li, 445-456.
- Li, C.N. 1976 (ed.). *Subject and topic*, New York: Academic Press.
- Li, C.N. and S.A.Thompson. 1976. Subject and topic: a new typology of language. In Li, 457-489.
- Lyons, J. 1970 (ed.). *New horizon in linguistics*. New York: Penguin Books.
- Olson, D. and N.Filby. 1972. On the comprehension of active and passive sentences. *Cognitive psychology* 3. 361-381
- Plank, F. 1979 (ed.). *Ergativity: towards a theory of grammatical relations*. London: Academic Press.
- Quirk et al. 1985. *Comprehensive grammar of English language*. London: Longmans.
- 柴谷方良, 1978, 1982 『日本語の分析』, 東京: 大修館,
- . 1982, 「言語類型論の展開」, 『言語』11, nom. 11, 23-30.
- Silverstein, M. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, 112-171.
- Teng, S. 1974. Double nominatives in Chinese, *Lg.* 50. 3. 455-473.
- Tomlin, R. 1986. *Basic word order: functional principles*. London: Croom Helm.
- Trask, R. L. 1977. On the origin of ergativity. In Plank, 385-404.
- Tsunoda, T. 1985. Remarks on transitivity. *JL.* 21. 385-396.
- Yamashita (Nieda), M. 1985. On voice category in grammar: activum-inactivum opposition. *Bulletin of Kyoto University of Education. Ser. A. No.66.* 103-117.
- . 1986, 「能格と態の交替との関係」, 京都教育大学紀要 Ser. A. No.69, 131-148.